

第 50 章

エテル 1－5 章

はじめに

モルモン書は年代順に編集されてはいない。もしそうであったなら、エテル書が最初になっているはずである。ヤレド人の記録は紀元前約 2200 年から始まっている。ニーファイ第一書が始まるのは紀元前 600 年である。エテル書には、紀元前 2200 年からコリアンタマーの時代までの 1,700 年間の歴史が記されている。コリアンタマーが生きていた時期は正確には分らないが、紀元前 500 年から 250 年の間である。モルモン書の残りの部分には、ニーファイ第一書からモロナイ書までで約 1,000 年間の歴史が記録されている。

ノアの時代に起こった洪水の後、命を助けられた人々の子孫の多くが邪悪になった。ある民は塔を建てて「その頂を天に届けよう」と試みた（創世 11:4）。ヤレド人の国家の話は、バベルの塔の建設から始まる。主は蔓延する悪に対処するため、共通の言語を乱し、民を地の全面に散らされた（エテル 1:33；創世 11:5－8 参照）。

ヤレドの兄弟は、ふさわしい友人と家族の言語を維持してくださるよう主に懇願した。深い信仰を示し、神の手に導かれながら、ヤレドの兄弟はこの一団を別の地に導くことができた。この移住の話は、今日わたしたちが自分の生活に応用できる重要な原則に満ちている。これらの原則には、神の助けを受けるために信仰を働かせることや、困難な務めを成し遂げる際の祈りの役割などが含まれる。ヤレドの兄弟の生涯を研究するとき、人が強い信仰を働かせるときに与えられる祝福について学ぶことになるだろう。

以下にエテル書の起源を確認しておく。

- エテルという名のヤレド人最後の預言者に至るまで、ヤレド人の預言者たちが歴史を書き記した（エテル 1:6 参照）。
- リムハイの探査によって、ヤレド人の歴史の一部が記された 24 枚の金版が見つかった（モーサヤ 8:7－11 参照）。
- モーサヤ王がヤレド人の記録を翻訳した（モーサヤ 28:10－17 参照）。
- モロナイがヤレド人の記録を短くまとめ、自分自身の記録の前に加えた（エテル 1:1－6 参照）。

注解

エテル 1:1－2 24 枚の版が発見される

- リムハイの民が奴隷の状態にあったとき、リムハイ王はゼラヘムラの地を探索するために 43 人の探検隊を派遣した（モーサヤ 8:7；21:25 参照）。探検隊はゼラヘムラを見つける

ことはできなかったが、滅びた民の骨と残存物が一面に散在している地を見つけた（モーサヤ 8:8 参照）。彼らは 24 枚の金版の記録を発見し、リムハイ王のもとに持ち帰った（モーサヤ 8:9－10 参照）。リムハイの民が最終的に奴隷の状態から逃れたとき（モーサヤ 22 章参照）、これらの版はモーサヤ王に渡され、翻訳された（モーサヤ 28:1－17 参照）。

エテル 1:3－4 モーセの時代以前の創造についての記録

- エテル書は、創造、アダム、およびバベルの塔の時代に至るまでの神の子供たちの歴史についての記録が、モーセの時代よりもずっと前に存在していたことを告げており、これは特筆すべきことである。この記録は背教と悪事によって失われた可能性があり、そのため、今日わたしたちがその記録を得られるように、モーセへの啓示によってこの知識を回復することが必要となったのであろう（モーセ 1:40 参照）。

エテル 1:6－32 ヤレド人の系図

- エテル 1 章には預言者エテルの系図が載っている。このような系図はモルモン書では珍しく、次のような説明がなされている。「聖書では系図を頻繁に目にする。ヘブライ人は家族歴史に多大な関心を持ち、系図を注意深く残したようであり、聖文に含まれている数の多さがその重要性を示している。次の各章にある系図に注目してほしい。創世 5 章、11 章、46 章；民数 26 章；歴代上 1－9 章。家族歴史を残すことの重要性を示しているエズラ 9－10 章の話も読んでもらいたい。しかしモルモン書では、多くの世代に及ぶ系図が記載されているのはエテル 1:6－32 に記された一例だけである。これはヤレドの民の最後の預言者であったエテルの系図であって、エテルの血統は 29 代以上さかのぼってヤレドに至る。このヤレドは、民の言語が乱されたときに家族とともにバベルの塔を去った人物である。この例を除くと、系図については参考となる記述が散見されるだけである。」（シドニー・B・スペリー、"Types of Literature in the Book of Mormon," *Journal of Book of Mormon Studies*, 第 21 巻, 第 1 項 [1995 年], 117）



エテル 1:34 - 35 ヤレドの兄弟の名前

• 七十人のジョージ・レイノルズ長老 (1842 - 1909 年) は、ヤレドの兄弟の名前 (エテル 2:13 参照) が預言者ジョセフ・スミス (1805 - 1844 年) に明らかにされたことを示す次のような話を述べている。「レイノルズ・カフーン長老がカートランドに住んでいたとき、男の子が生まれた。ある日、ジョセフ・スミス大管長が家の前を通り過ぎようとしたとき、彼は預言者を呼び入れて、その子を祝福し、命名してくれるよう依頼した。ジョセフはこれにこたえて、その男の子をマホンライ・モリアンカマーと命名した。預言者は祝福を終えると、その子をベッドに寝かせ、カフーン長老に向かって、『あなたのお子さんに授けたのはヤレドの兄弟の名前です。主が今しがたわたしにそれを示して〔啓示して〕くださいました』と言った。ウィリアム・F・カフーン長老は、預言者が父親に説明したことを聞いていた。このときこの神権時代で初めてヤレドの兄弟の名前が教会で明らかにされたのだった。」(“The Jaredites,” *Juvenile Instructor*, 1892 年 5 月 1 日付, 282)

エテル 1:33 - 38 ヤレドとヤレドの兄弟の言語

• エテル 1:34 - 38 には、バベルの塔の時代に主がヤレドの家族と、ヤレドの兄弟と、彼らの友人たちの言語を乱されなかったことが記録されている。ジョセフ・フィールディング・スミス大管長 (1876 - 1972 年) は、ヤレド人は恐らくアダムの言葉を話していたと思われると教えている。「エテル書には、バベルの塔で言語が乱されたとき、ヤレドと彼の兄弟は自分たちの言語が変えられないように主に願ったと述べられている。その願いはかなえられ、彼らは引き続き先祖の言葉であるアダム語を用いた。アダム語は書き記されたときでさえも力強く、マホンライが書き記したことは『力強く、それを読む者を圧倒するほどのもの』であった。アダムが用いていたのはそのような言語であり、エノクはこの言語を用いることでその力ある業を成し遂げることができたのだった。」(*The Way to Perfection* [1970 年], 69)

エテル 1:38 - 42 えり抜きの地

• イスラエルの家の者が、選ばれた民、すなわち、主の業を行うように選ばれた民と呼ばれているのと同じように、モルモン書の中でアメリカ大陸は、選ばれた地と呼ばれている。すなわち、福音の回復と、最終的には新エルサレムのための場所となるように選ばれた地である。イスラエルの家の者もアメリカ大陸も、福音を全世界に広めることにおいて天の御父を助けるように選ばれているのである。

• ジョセフ・フィールディング・スミス大管長は、南北アメリカの全地はえり抜きの地であると説明している。「モルモン



書は、南北両アメリカ大陸全体がほかのあらゆる土地に勝ったえり抜きの土地、すなわちシオンであるとわたしたちに告げている。主はヤレド人に、彼らを『地のあらゆる土地に勝ったえり抜きの土地』〔エテル 1:42〕へ導こうと言われた。」(*Doctrines of Salvation*, ブルース・R・マッコンキー編, 全 3 巻 [1954 - 1956 年], 第 3 巻, 73)

• エズラ・タフト・ベンソン大管長 (1899 - 1994 年) もまた、アメリカ大陸は選ばれた地であると語っている。「1844 年、預言者ジョセフ・スミスは次のように厳粛に宣言しました。『アメリカ全土は北から南に至るまでシオンそのものです。』(*Teachings of the Prophet Joseph Smith*), 362) 主御自身、次のように宣言しておられます。『この地〔は〕ほかのあらゆる地に勝ったえり抜きの地〔である〕。』(エテル 2:10) この国はシオンの地の一部です。この地は神の僕たちによって奉獻された地です。モルモン書の預言者は世界の諸国について述べたとき、この半球を『良い』土地と呼びました (ヤコブ 5:25 - 26)。』(*The Teachings of Ezra Taft Benson* [1988 年], 123)

エテル 1:38 - 43

選ばれた地へ導かれたとき、ヤレド人は何を携えていくように指示を受けたか。それら一つ一つはどのような点で重要だったのか。

エテル 1:43 「あなたがこのように長い間わたしに叫び求めてきた」

• 主はヤレドの兄弟に、祝福が彼の民にもたらされたのは祈りを長い間ささげた結果であると説明された。根気強く頻繁に祈りながら従順に堪え忍ぶことには力がある。1839 年にイリノイ州コマースで行った説教の中で、預言者ジョセフ・スミスは次のように教えている。「神は人を偏り見ることのない御方であり、わたしたちはだれもが同じ特権を受けています。神のもとに来て、神が祝福を下さるまで祈り続けてください。わたしたちには同じ祝福を受ける資格があることが分かるでしょう。」([Willard Richards Pocket Companion, 78 - 79 に収録] *The Words of Joseph Smith: The Contemporary*

Accounts of the Nauvoo Discourses of the Prophet Joseph, アンドリュー・F・エハット, リンドン・W・クック [1980 年], 15 で引用)

• スペンサー・W・キンボール大管長 (1895 - 1985 年) も同様に、わたしたちは祈りに大いに力を注がなければならず、また頻繁に祈らなければならないと教えている。

「祈りの答えを得ていますか。もし得ていないなら、恐らくその代価を払っていないのでしょう。決まりきった言葉を並べ立ててはいませんか。親しく主に語りかけているでしょうか。定期的に、頻繁に、絶えず祈るべきなのに、時々しか祈ってはいないのでしょうか。多額の負債を返済するために何ドルも支払うべきなのに、わずかな小銭をささげてはいないのでしょうか。

祈るとき、ただ語るだけでしょうか。耳も傾けていますか。救い主は言っておられます。『見よ、わたしは戸の外に立って、たたいている。だれでもわたしの声を聞いて戸をあけるなら、わたしはその中にはいて彼と食を共にし、彼もまたわたしと食を共にするであろう。』(黙示 3:20)

……祈りの答えが得られないとしたら、自分の生活を調べて原因を見つける必要があります。」「(「祈り」『聖徒の道』1980 年 5 月号, 3 - 4 参照)

エテル 2:7 - 12 「約束の地」

• エテル 2:8 - 11 には、モロナイがこの約束の地に関する「神の永遠の定め」と呼んでいる事柄が述べられている (10 節)。3, 4 度にわたって述べられているこの定めとは、「この地を所有する国民はどの国民も神に仕えなければならぬ。さもなければ、……彼らは一掃される」というものである (9 節)。

ゴードン・B・ヒンクレイ大管長 (1910 - 2008 年) は、約束の地で約束された祝福を得るには従順が不可欠であると教えている。「このアメリカの地には大いなる約束があります。わたしたちははっきりとした言葉でこう告げられているのです。『この地はえり抜きの地であり、この地を所有する民はどの国民も、この地の神に仕えさえすれば、奴隷の状態にも囚われの身にもなることなく、天下のほかのどのような国民からも支配を受けない。この地の神とはイエス・キリストであ[る。]』(エテル 2:12) この約束は取り消されることがありません。最も大切なことは神の戒めに従うことです。」「(『リアホナ』2002 年 1 月号, 85)

エテル 2:7 - 12

エテル 2:7 - 12 を 2 ニーファイ 1:6 - 10 と比較する。アメリカ大陸に住む人々に与えられている約束と警告を挙げる。

エテル 2:14 主はヤレドの兄弟を懲らしめられた

• 現代の啓示の中で、主は次のように教えておられる。「わたしはまた、愛する者たちを懲らしめる。それは、彼らの罪が赦されるためである。わたしは懲らしめるとともに、すべてのことにおいて彼らが誘惑から救い出される道を備えるからである。わたしはあなたがたを愛してきた。」(教義と聖約 95:1) 十二使徒定員会のジェフリー・R・ホランド長老は、懲らしめに堪え忍ぶために必要な人格の強さについて述べている。「主から 3 時間にわたって懲らしめられることがどのようなものであるか想像するのは難しいが、ヤレドの兄弟はそれを堪え忍んだ。この預言者は直ちに悔い改めて祈り、行うように命じられていた旅について、そして同行することになっていた人々のために、再び導きを求めた。神はヤレドの兄弟の悔い改めを受け入れ、彼らのきわめて重要な任務について愛をもってさらに指示をお与えになった。」(*Christ and the New Covenant* [1997 年], 15)

• 十二使徒定員会のニール・A・マックスウェル長老 (1926 - 2004 年) は、神は御自分が懲らしめる者を愛しておられると説明している。「霊的に傑出した人も含めて、愛する人を懲らしめるとき、主は確かにその場におられます。ヤレドの兄弟は長い間祈ることをしませんでした (エテル 2:14 参照)。善良な人でも、主がその場に臨んで懲らしめないと注意を怠ってしまうことがあるのです。しかし、懲らしめを受けたヤレドの兄弟は、後にキリストにまみえました (エテル 3:13 - 16 参照)。」「(『聖徒の道』1988 年 1 月号, 33)

エテル 2:19 - 3:6 光を得ることは成長につながる経験であった

• 十二使徒定員会のロバート・D・ヘイルズ長老は、ヤレドの兄弟の経験をわたしたち自身の経験と比べて次のように述べている。

「船には光がありませんでした。ヤレドの兄弟はそのことを心配しました。家族を暗闇の中に閉じ込めたまま旅を進めたくはなかったのです。そこで、命じられるのを待つのではなく、気がかりだったこのことを主に打ち明けました。『主はヤレドの兄弟に言われた。「あなたがたは、船の中に光があるようにするために、わたしに何をしてもらいたいのか。』」

〔エテル 2：23〕

この質問に対してヤレドの兄弟が出した答えは、彼自身の懸命な努力を要するものでした。ヤレドの兄弟はシーレム山に登って、『一つの岩から十六個の小さな石を溶かし出し』ました〔エテル 3：1〕。そして光を放つものとするために、石に触れてくださるよう主に願い出たのです。



ロバート・バレット、© 1986 IRI

親として、また指導者として、『〔主〕がすべてのことを〔お命じになる〕のは適切ではない』〔教義と聖約 58：26〕ことを忘れてはなりません。ヤレドの兄弟のように、家族の必要について注意深く考える必要があるのです。そして、それらの必要を満たす計画を立て、祈りによってその計画を主の御前に提示しなければなりません。信仰と努力を必要としますが、主の助けを求め、御心を行^{みこころ}うときに、主は助けてくださいます。』（『リアホナ』2003年5月号、16）

• 主はわたしたちが自分自身で決定を下しながら成長し、学ぶことを望んでおられる。また、度々自分の結論を携えて主のもとに行き、主の確認を得るように望んでおられる。ヤレドの兄弟が船の光の件で主に尋ねたとき、主は次のような質問をもって答えられた。「あなたがたは、船の中に光があるようにするために、わたしに何をしてもらいたいのか。」（エテル 2：23）ハロルド・B・リー大管長（1899－1973年）によれば、主の質問は次のように言っておられるのと同じであった。

「『では、あなたには何か良い考えがあるか。光があるようにするために、わたしたちはどうすればよいとあなたは思うか。』……」

その後、主はヤレドの兄弟を独り残して去って行かれた。それはあたかも主がヤレドの兄弟にこう言っておられるかのようであった。『見よ、わたしはあなたに考えるための知力を与え、それを用いるための選択の自由を与えた。そこで、この問題を切り抜けるために行えることをすべて行いなさい。』

い。あなたが自分の行えることをすべて行った後に、わたしはあなたのもとに行ってあなたを助けよう。』」

数々の可能性について検討した後、ヤレドの兄弟は深い信仰を示し、主に16個の石に触れて光を与えてくださるようお願い求めた。主はこの嘆願にこたえ、船に光を与えただけでなく、この忠実な者にほかに類を見ないような示現を授けられたのであった。

リー大管長は次のように結んでいる。「これが行動の原則である。祝福を望むなら、それについてひざまずき祈るだけであってはならない。求める祝福を受けるにふさわしい者となるために、自分にできる考えられる限りの方法で自分自身を備えなさい。」（*Stand Ye in Holy Places* [1974年]、243－244）

エテル 2：22－23 祈りには努力が求められる

• すべてのことが主にかかっているかのように祈り、すべてのことが自分にかかっているかのように働くべきである、としばしば言われる。十二使徒定員会のラッセル・M・ネルソン長老は、ゴードン・B・ヒンクレイ大管長が次のように言うのをよく耳にしたと述べている。「ひざまずいて助けを求め、立ち上がって働くこと以外に物事を処理する方法は考えられません。」（『聖徒の道』1998年1月号、17）

• 十二使徒定員会のブルース・R・マッコンキー長老（1915－1985年）は、わたしたちが主の助けを求める際、主はわたしたちに選択の自由を用いるように求められると説明している。ヤレドの兄弟の経験について、マッコンキー長老は次のように述べている。「そのことについてヤレドの兄弟と少し話した後、主はこう言われました。『あなたがたは、船の中に光があるようにするために、わたしに何をしてもらいたいのか。』（エテル 2：23）これはすなわち、『わたしに何をしてもらいたいのか。これはあなたが解決すべき問題である』という意味です。そして主は若干の事柄を述べ、同じように繰り返し問いかけておられます。『あなたがたが海の深みにのまれるときに光があるように、あなたがたはわたしに何をしてもらいたいのか。』（エテル 2：25）換言すると、『モリアンカマーよ、これはあなたの問題である。なぜわたしを煩わすのか。わたしはあなたに選択の自由を与えている。また力と才能を与えている。自分でこれを解決しなさい』と言っておられるのです。」（『自由意志か、靈感か』『聖徒の道』1978年5月号、34参照）

エテル 3：1－5 「まことに、おお、主よ、あなたにはこれがおできになります」

• ジェフリー・R・ホランド長老は、ヤレドの兄弟が「まことに、おお、主よ、あなたにはこれがおできになります」（エ

テル 3:5) と言ったときに示した子供のような純朴な信仰について、次のように語っている。「確かに神は、読者と同様、この人物の子供のように純真で熱烈な信仰に何か非常に際立ったものをお感じになるであろう。『まことに、おお、主よ、あなたにはこれがおできになります。』人が語った信仰の言葉でこれ以上に力強いものは、恐らく聖文の中にないであろう。それはあたかも神を勇気づけ、励まし、安心させているかのようである。『まことに、おお、主よ、あなたにはこれがおできになるとわたしは確信しています』ではない。『まことに、おお、主よ、あなたはこれまでにこれよりも大いなることをたくさん行ってこられました』でもない。自分自身の能力についてはどれほど不確かであっても、この預言者は神の力については不確かなところがまったくないのである。ここにあるのは、迷いの兆しのかけらもない、誠実で明瞭で大胆で断定的な宣言だけである。それは神への励ましであり、神は励ましを必要とする御方ではないが、確かにその言葉に感動されたに違いない。『まことに、おお、主よ、あなたにはこれがおできになります。』」(“Rending the Veil of Unbelief,” *Nurturing Faith through the Book of Mormon: The 24th Annual Sidney B. Sperry Symposium* [1995 年], 12)

エテル 3:6 - 16

これらの節を調べ、ヤレドの兄弟が救い主について
示現から学んだことを確認する。
あなたが学んだことをノートに列挙する。

エテル 3:15 「わたしは、これまで〔人〕に一度もわたし自身を現したことはない」

・イエスはヤレドの兄弟に御自身を現す前には人に一度も御自身を現したことがないと言われた。ジェフリー・R・ホルランド長老は、この言葉に関して考えられる 6 つの解釈について論じている。

「一つの可能性は、これは単に一つの神権時代という枠の中で語られたもので、この言葉はヤレドの民とヤレド人の預言者たちに対してのみ当てはまるというものである。すなわち、エホバはそれ以前に彼らの聖見者や啓示者に御自身を現されたことがなかったということである。……

もう一つの意見は、この一節では“man”(「人」。訳注——日本語訳では『者』と訳されている) と言っている点が鍵であり、主は聖められていない人、信仰心のない人、世俗的な生まれながらの人一度も御自身を現されたことがない

ということの意味するというものである。これはつまり、生まれながらの人を捨てて聖められた人(アダム、エノク、そしてこの時のヤレドの兄弟など)だけがこの特権を受けるに値することを示唆している〔教義と聖約 67:10 - 11 参照〕。

主はこれほどの程度または範囲において御自身を現されたことがないという意味で言われたと信じている人もいる。この見解では、それ以前の預言者たちに対する神の現れはそれほど『完全な』ものではなく、キリストの性質と存在についてそれほど完全な啓示が与えられるほど幕が取り払われたことは一度もなかったということを示唆している。

さらに、この一節を『わたしは、これまでわたしの造った者に一度も〔イエス・キリストとして〕わたし自身を現したこ



ロバート・パレット、© 1986 IRI

とはない』と解釈して、エホバが御自身を現し、自らがイエス・キリスト、神の御子であることを明らかにされたのはこれが最初であるという考え方もできる。後にモロナイが編集の際に記した次の言葉は、読み方によってはこの考

えの説得力を増している。『彼は神についてのこの完全な知識を得たので、幕の内側を見るのを禁じられなかった。それゆえ彼は、イエスにまみえ……た。』〔エテル 3:20〕

この一節のさらに別の解釈は、ヤレドの兄弟の信仰が非常に深かったので、彼は降誕前のイエスの霊の指と体を見ただけでなく(これは恐らくほかにも多くの預言者たちが見ていたであろう)、キリストの肉と血と骨の体をよりはっきりとした形で見たというものである。……

最後の解釈は、キリストはヤレドの兄弟に『わたしは、これまでこのように、わたしの意思によらず、見る者の信仰だけに突き動かされてわたし自身を現したことは一度もない』と言っておられたのだという解釈であり、これはヤレドの兄弟の信仰を考えたときに最も説得力がある。一般に、預言者は主の御前に招かれるのであり、主の承認を受けたときのみ、主のもとに来るように主から命じられる。一方、ヤレドの兄弟は、歓迎されない客としてではないにせよ、恐らく厳密には招きを受けていない者として、自分で幕を押し分けて突き進んだように思われる。エホバは次のように言われた。『これまでにあなたのような深い信仰をもって、わたしの前に来た者は一人もいない。もしそうでなければ、あなたはわたしの指を見ることができなかったであろう。……あなたほど深くわたしを信じた者はいなかった。』主御自身が前例のない信仰をこの前例のない示現と関連付けておられたのは明らかである。示現そのものは唯一無二のものではなかつ

たとすれば、信仰と、示現の与えられ方が比類のないものであったに違いない。この預言者はその信仰のゆえに、ほかの預言者たちは神に命じられた場合にしか行くことのできなかった所へ、招きを受けていないにもかかわらず行くことができたのであり、それを可能にしたという点で、彼の信仰がいかに並外れたものだったかが分かる。」(Christ and the New Covenant, 21 – 23)

エテル 3:23 – 24, 28 モーサヤ王の二つの石

・預言者ジョセフ・スミスは「ヤレドの兄弟が主と顔と顔を合わせて語ったときに山の上で授けられた」のと同じウリムとトンミムを用いた(教義と聖約 17:1)。ジョセフ・フィールディング・スミス大管長は、ウリムとトンミムに関する略史を記している。

「モーサヤ王は『弓形のものの両端にしっかりと取り付けられた……二つの石』を持っていた。ニーファイ人はこれを解訳器と呼んだ。モーサヤ王はこれを使ってヤレド人の記録を翻訳した[モーサヤ 28:11 – 14]。そしてこれは言葉を翻訳する目的で代々受け継がれていった。モーサヤがどのようにしてこの二つの石、すなわちウリムとトンミムを入手したかについて記録は告げていない。これは『神からの賜物』であるとしか言っていない[モーサヤ 21:28]。モーサヤはリムハイの民がエテルの記録を発見する前にこの賜物、すなわちウリムとトンミムを持っていた。文字の刻まれた『大きな石』がモーサヤのもとに持って来られたときに、ウリムとトンミムを受け取っていたのかもしれない。モーサヤはこの文字を『神の賜物と力』によって解読した[オムナイ 1:20 – 21]。モーサヤ、あるいは彼よりも前のほかの預言者は、ヤレドの兄弟と同じように、ウリムとトンミムを主から授かっていたのかもしれない。

モーサヤが持っていたのが、ヤレドの兄弟に与えられたウリムとトンミム、すなわち二つの石であったことは、モルモン書の教えからほぼ明らかである。ヤレドの兄弟はキリストが彼に御自身を現されたときの示現に関する記述を封じて民が読めなくするように命じられた。……ウリムとトンミムも封じられた。主がよしとされる時が来るまで、この示現に関する神聖な記述を翻訳する目的でウリムとトンミムを使用することがないようにするためであった。それらの記述が明らかにされるときには、同じウリムとトンミムの助けによって翻訳されることになっていた[エテル 3:21 – 28]。……

ジョセフ・スミスは胸当てとモルモン書の版とともにウリムとトンミムを受け取った。これは昔の記録を翻訳する手段として、末日に世に出るようにモロナイが隠したものであった。このウリムとトンミムはヤレドの兄弟に与えられたもので

あった[教義と聖約 17:1]。』(Doctrines of Salvation, 第 3 巻, 223 – 225)

エテル 3:25; 4:1 – 7 モルモン書の封じられた部分

・モロナイは、ヤレドの兄弟(モリアンカマー)がその示現の中で見た世の初めから終わりに至るまでの地に住むすべての者について記録したと書いている(エテル 3:25 参照。エテル 2:13 も参照)。この示現は「世の初めから世の終わりまで、すべてのことを示すものである。」(2 ニーファイ 27:10) モロナイは、ヤレドの兄弟が見たもの以上に「大いなることは、いまだかつて明らかにされたことがない」と説明している(エテル 4:4)。わたしたちはモロナイがこの示現の写しを、彼がジョセフ・スミスに渡した版とともに封じたことを知っている(エテル 4:5; 5:1 参照)。モロナイはさらに、この記録の封じられた部分が世に出される条件として主が示されたことについてもわたしたちに告げている。わたしたちは悔い改め、ヤレドの兄弟が行ったように主を信じる信仰を働かせ、聖い者とならなければならないと聖文は述べている(エテル 4:6 – 7 参照)。



エテル 5 章 預言者ジョセフ・スミスに対する指示

・モロナイは「エフライムの木の記録の鍵」を持っていた(教義と聖約 27:5)。エテル 5 章で、モロナイは将来モルモン書を翻訳する者に向けて話している。ただし、預言者ジョセフ・スミスがその言葉を読むまでに 14 世紀近くが経過することになる。

エテル 5 章 証人たちの証

・エテル 5:2 では、「[ジョセフ・スミスが] 版を見せるのを……許される」人々、具体的に言えば八人の証人について述べられている。3 – 4 節では、「神の力によって」版を見ることになる「三人」、すなわちモルモン書の三人の証人について具体的に述べられている。4 節ではまた、その言葉は「証となるであろう」と述べられており、モルモン書自体が一つの証となることを示している。またこの同じ節には、神会の御三方がモルモン書についての証人であられることも示されている。

エテル 5:2 – 4 では、モルモン書の三人の証人について特に述べられている。1829 年 6 月、預言者ジョセフ・スミスは啓示を受け、「三人の特別な証人が指名されることを知った(エテル書第五章二 – 四節, ニーファイ第二書十一章

三節、第二十七章十二節参照)。オリバー・カウドリと、デビッド・ホイットマーと、マーティン・ハリスは、三人の特別な証人となる望みを持つよう靈感によって促された。」(教義と聖約 17 章の前書き) モルモン書のはしがきの部分には、三人の証人の証が載っている。これらの三人の証人について、十二使徒定員会のダリン・H・オークス長老は次のように述べている。

「3 人のうちの二人が同時に啓示を受け、続いて 3 人目の人はその直後に受けたのですが、その 3 人が自ら見聞きしたことについての書面による厳かな証は、重要視されるべきものです。確かにこれまでも、一人の証人の証が基となって、多くの信仰深い人々が偉大な奇跡を承認し、受け入れてきました。またこの社会では、一人の証人の証言だけでも、重大な罰や判決を下すに十分であると考えられてきました。

証言を評価するという経験を積んだ人はいいて、証人が実際にその出来事を目撃する機会があったか、またその件に関する偏見の可能性がないかを考慮します。もし複数の証人が同一の出来事に対して同一の証言をするならば、共謀の証拠がないか、またそれに相反する証言がないか、疑いの目が向けられます。

考えられる反対意見すべてから計られても、モルモン書に対する三人の証人の証は力強くそれに立ち向かっています。もしその証が偽りであったのなら、3 人それぞれについて、自分の証を放棄する理由と機会が十分にありました。また正確でない部分があったとすれば、詳細についてあいまいな発言をする理由と機会も十分にありました。よく知られているように、教会の他の指導者を巻き込む不和やねたみのために、三人の証人はそれぞれ、証言が公表されてからおよそ 8 年のうちに、末日聖徒イエス・キリスト教会から破門されています。3 人とも共謀を図るほどの共通した関心というものがなかったので、それぞれの道を進みました。しかしどの人も、破門されて後 12 年から 50 年にわたる、その生涯の終わりの時まで、だれ一人として公表された証言を曲げたり、その真実性に影を落とすようなことは言ったりしませんでした。

さらに彼らの証言はほかの証人による証言と矛盾するところがありません。一人くらいその証を却下してもよさそうなものを、ばかにされたり、不利な状況に立たされたりするとい

うのにもかかわらず、3 人の善人が一致して、生涯この公表された証言に固執し続けたというのは、どのように説明できるでしょうか。モルモン書自体と同様に、善良で正直な人たちが何を見たか、その証言の中で厳粛に明言しているということが、いちばんの説明なのです。……

……証人は重要です。そして三人の証人のモルモン書に対する証は印象的で、信憑性があります。」(『リアホナ』1999 年 7 月号、41 - 42)

エテル 5 章

証人の律法とモルモン書の三人の証人について、
この章はどのようなことを教えているか。

理解を深めるために

- わたしたちが読めるように、モロナイがエテルの記録を短くまとめたものをモルモン書に加えたのはなぜだろうか。
- ヤレドの兄弟はその忠実さで知られていた人物であり、今日も同様である。それでもなお主から懲らしめを受けたのはなぜだろうか。わたしたちはこのことを自分の生活にどのように当てはめることができるだろうか。
- 主に質問を尋ねるときに主から期待されることについて、ヤレドの兄弟はどのような教訓を学んだだろうか。
- モルモン書の三人の証人の証は、あなた自身の証をどのように強めてくれるだろうか。

割り当ての提案

- 自分が現在悩んでいる問題について考える。ヤレドの兄弟が彼の難問を解決するために用いたパターンを用いながら、自分自身の状況を解決するに当たって同じ原則を応用する。自分の問題を解決するためにこれらの原則をどのように応用すればよいだろうか。
- 以下の質問に答えて自分の祈りがどのくらい力強いかを評価し、深く考える(注意——この評価は個人的なものであり、内密にすべきである)。

あなたの祈りはどうだろうか	
10 段階評価で、あなたは自分の個人の祈りをどのように評価するだろうか（1 が最低、10 が最高とする）。	
心からささげているだろうか。	1 2 3 4 5 6 7 8 9 10
十分に時間をかけているだろうか。	1 2 3 4 5 6 7 8 9 10
頻繁にささげているだろうか。	1 2 3 4 5 6 7 8 9 10
従順さを伴ったものだろうか。	1 2 3 4 5 6 7 8 9 10
語り終えた後、答えを求めて耳を傾けているだろうか。	1 2 3 4 5 6 7 8 9 10
ただ主に話しかけるのではなく、主と語り合っているだろうか。	1 2 3 4 5 6 7 8 9 10